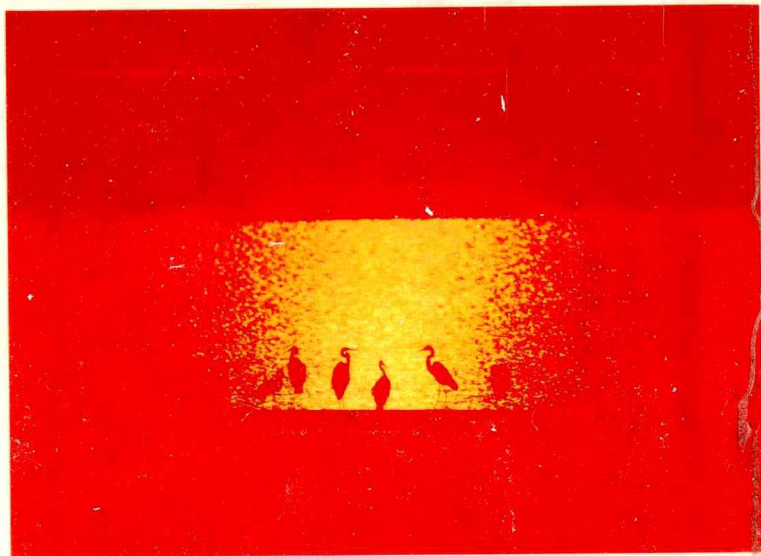


C BOOKS

女性のための短歌教室

歌にあなたを生かすために

宮 柊 二



C*BOOKS

C*BOOKS 17

©1983年

じよせい
女性のための短歌教室

たんかきようしつ

検印廃止

著 者 みや 宮 しゆう 柊 じ 二
発行者 高 梨 茂

本文印刷 三晃印刷
カバ ー トープロ
製 本 小泉製本

行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7
振替東京 2-34

女性のための短歌教室

歌にあなたを生かすために

宮 柊 二

中央公論社

ブック・デザイン 山口至剛

目次

まえがき

愛の歌

四季の歌

自然を歌う

働く人の歌

家族を歌う

老いを歌う

雑詠——生活の歌

7

9

35

109

122

153

181

193

女性のための短歌教室

まえがき

私たちが生きている、ということは、ある刹那ある一瞬の連続であり、それは刻々に流れ去ってしまふ。そうした流れ去る刹那の一瞬の事象や感動に、形を与えてとどめるのが短歌である。掬い取った感動に作者の心のありさまが残される。いつまでも残される。私はそれを生の証しと言ひ、短歌を作ることによってみずからの「生」を証明したいと念じている。

ここに選んだ六〇〇首は、『婦人公論』の読者投稿短歌を受け持った昭和四十五年から五十六年までの入選歌の一部である。『婦人公論』の投稿歌は特異である。年齢層も比較的若く、環境も多様であつて、素材に固定感がない。時には、短歌以前の、噴きあげてくるような感情を投げ出した歌があつたり、また、自立した知性の冷静さの上に立つ歌もある。それぞれが、その人の生きた証しなのである。

とはいへ、投稿短歌の選歌は、一枚一枚の葉書の向うに作者の眼を意識し、その葉書から訴えてくるものを、逃すまいとする努力と忍耐の相剋の作業と言つていい。大げさな言い方のようだ

が、実際一枚の葉書の歌を、落とそうか、採ろうかと迷うときがある。いま落としてしまったら、この作者のこの歌は、あるいは永久に埋没してしまうかもしれない。そんなことが頭をかすめて迷うのである。

毎号毎号、私はできるだけ真摯に選歌に当たってきたつもりである。この一冊が、歌を愛好する方の座右に置いて頂ければ有難い。

愛の歌

日本の古い伝統和歌集、例えば『万葉集』では「相聞」と「挽歌」を大きな部立とした。部立とは、内容による分類である。相聞は愛を、挽歌は死をあらわす。歌によって最も感情が流露しやすい内容である。殊に短歌は情を述べる詩である。言葉をかえれば、歌の姿の基本は抒情であるといっている。亡くなられた釈道空氏は、私に「愛のこころを経なければ歌にうるおいが出ない」と言われたことがある。人を愛することは心の目覚めであり、愛によって心が寛やかになり和らぎを生じる。自然を見る目、周囲への処し方も変わってくる。しかし「愛すること」は美しいばかりではない。悲しみ、憎しみ、苦しみなど愛は同時に胚胎し、時には失意の無間地獄の相をも暗示する。愛はそれすらも養分としながら、人の「心」を培ってゆく。

ここに収めた「愛」の歌の様々は、本書で最も注目していただいてよい作品かと思う。心を打つ歌が多い。



十代の終りを経つつ十代の思慕消え淡き思い出残る

大津市 大塚みち代

十代のあこがれは淡く消え去った。その夢のようだった思慕が、夢のような淡い思い出として残ったという振り返りと確認。「十代の終りを経つつ」があざやかな言い方である。作者は十九歳だという。甘美とっていい内容であるが、客観視の態度またその表出が冷静で甘い歌におちいていない。

夏草のいきれの中に身を投げて一人むせびつ恋愛とは何

伊那市 小川早苗

作者は、人を愛する苦しみそのものに苦しんでいる。恋愛は甘美なだけではない。常に充実を求める性質のものにとっては、また苦しみとしてもある。上三句は官能的であるけれど、それは作者にとってやるせない気持のはけ口に苦しむ姿でもある。一体、恋愛とは何だろうと、自分の苦しみを追っているのであろう。

陽炎に似て我が胸に燃ゆるもの捉えんとして苛立ちており

横浜市 永田ゆき子

人間には、捉えがたく説明しがたい感動あるいは感情が常にあり、それは幸福、満足である場合も、焦燥、悲哀である場合も、思慕や愛恋である場合も、いろいろとあるわけだが、そういう自分にもさだかではない感情を作者はじっと見ている、自分の中に。

失恋を告ぐればハハと哄り兄につられて受話器に舌を出すわれ

東京都 徳武厚子

軽快で、正直で、率直で、言葉に凝ったり、内容を修飾したりしないところがよい歌だと思う。ただし、舌を出しても、本当は寂しいだらう心がちょっと感じとれる。

読書する夫の背妙に深々と迫るがにまぶしわれが身のうち

ブラジル 谷内恭子

作者が付記された説明には「秋の夜は主人も好んで勉強するようです。スタンドの光のもとで読書する主人の背を、私は床の中で頼もしいものと眺めているうちに。女とはおかしなものですね」とあった。五句が大切な句であるように思える。「女とはおかしなものですね」という含みを「われが身のうち」に托したのであらう。

茹卵の盛られし昼の食堂に時を合わせて我らは逢いぬ

山口県 有田絢子

セルフ・サービスで、盛ってある茹卵を、各人が自分で自分の食膳に持ってゆくのであろう。職場は違っているのだからけれど、時間を打ち合わせてさえおけば、一つ食堂ゆえに、またセルフ・サービスゆえに、その時間に落ち合うことができるのであろう。何か古風な、また他をはばかりる恋愛をしているような感じの歌ながら、しかし、事実だけを内容として、その事実の扱い方が鋭敏でいてあたたかい。

何気なく君にもらいし椿の実夏の夕べに艶秘めてあり

大館市 藤沢民子

意味や思想がないような歌だけれど「夏の夕べに艶秘めて」いたという感覚が、歌の心であり、歌における思想である。そしてそれは「君」にもらったということに関連している。それが歌の意味である。

君の手に触れたき想いこらえ来て夜の厨に我が手を噛みぬ

東京都 杉田玲子

愛することの充たされない飢餓感を描いている。与えたい、与えられたいとする欲求をこらえて別れたあと、なおその欲望に耐えかねて、キリキリと我と我が手を噛む。真情を述べた歌だ。

君のこと何も知らねど近くいて息苦しさはよろこびに似る

大阪市 堀 朋子

そばにただで、胸に一杯に満ちてくるもの——それは息苦しい充実感であり恋する人のよろこびでもある。三句以下、言いあらわしにくい、女性の微妙な心理を率直に表出している。

いまのいま祈りながらも神を離れ人に走るは罪か弱さか

千葉市 梶取美佐子

愛に苦しむ悩みであろうか。緊張した調べは一首を甘くしていない。「人に走る」は、「親しい」あるいは「恋しい」人に心が走る意であろう。神の目から、また人間の目からは、それが「罪」と「弱さ」のどちらに裁かれるだろうかという意であろう。

かた恋のあつき思いを追いつと胸たたくときただにかなしき

福生市 森田あつ子

一気に詠まれていて、作者の嘆きが読者にひびいてくる。胸を叩いて片恋のあつい嘆きを追いつ出すというのは、いかにも若い人らしい。叩いて忘れられる思いではないが、忘れようと自分を虐めるのである。五句の「ただにかなしき」は全体を統一した句で、言いがたい作者の深い嘆きがここに重くこもって響いている感じである。

老いてなおたくまじきわが手を見つつ四十で死にし夫の手を思う

久留米市 吉山綾子

こういう「手」を媒体に、ある追想をするという発想は、あるいは、似た形がすでにあるかもしれない。しかし、「老いてなおたくまじき」現世のわが手と、「四十で死にし夫の手」を比較して思うなど、手法が明快で、生命感が生き生きとしている。

別るべく心を決めて地下鉄の車中に君にわれは笑みおり

下関市 田村史子

心決めて静かに何気なくいる女性像が、ほうふつとする。やや小説的、作爲的な構成のように見えるけれど「地下鉄の車中に」が具体的であり、特殊であって、それゆえに「君に」以下が生き、歌の誠実が響いている一首といった感じである。

憐憫^{れんぴん}の目をなげかけてくださるなわたしが愛をまだ知らずとも

四条畷市 脇 一加

作者は十八歳だという。若い作者を少女のように見る大人への批評、抗議、そして自信。やがて、私はすばらしいきらめくような恋愛を、人を、得てみせますよ、といった余情がある歌かもしれない。すると、愛を見せつける同性への歌でもあるうか。

病室に不意に訪れ来し人を君と認めた我が眼おどろく

栃木県 蓼沼イセ子

歌は感動を主体とする文学であるという。この歌は、ただたく幼さが感じられるが「君と認めた我が眼おどろく」が新鮮だ。ズバリと言った点も若々しい。一、二、三句には訪ねてきてくれる「君」と思わなかったいぶかしみとうたがいが滲み、四、五句で、その予期しなかったことの実現のおどろき、喜びが出ている。「認めた」などという口語も、急^キいた気持ちのうろたえに似る喜びになっている。

夫の背に凭れて坐る青芝生葉桜わたる風の音を聞く

金沢市 越井和子

若い二人が見えるような、健康な歌だ。「夫の背に凭れて坐る」という甘えを示す表現が甘くなくて、かえってすがすがしい。四、五句はさらに清新。無駄のないきびきびした詠み方で、それだけに、余韻をもつといった作ではないけれど。ただ、一、二、三句は俳句になりかねないのだが、そこを四、五句が救っている。つまり明らかな境地を、明らかな表現法で、描き出している歌なのである。

畑中に君をいざない野の井戸の光れる空を見下ろさんとす

奈良市 藤尾時子